

❖ 多様性を交流の契機に

『社会と調査』は2008年9月に創刊され、社会調査士資格認定機構から社会調査協会への移行という重要な節目を刻んで、第5号が発行されるまでになった。『社会と調査』は、いまや社会調査協会の事業や方向性を先導し、牽引する役割を果たしている。

本誌の魅力は、誌面からたちのぼってくる騒然たる活気にある。学会誌にあるようなとりすました表情は、そこにはない。ダイヴァシティ（多様性）や差異の価値の重視が、誌上を活性化する要素になっているからだろう。書き手の専門もさまざまなら、その所属も、大学だけでなく行政、マスメディア、調査機関とバラバラである。差異や多様性を交流の契機とする流儀が、生き生きした誌上空間を生みだしている。

「面接調査の回収率が一番高くなくてはならない学術研究が、もっとも低い回収率で何がいえるのか」という世論調査の現場からの発言があれば、「マスコミの世論調査報道の監査は誰がするのか」という、研究者からの問題提起もある。社会調査士の資格が「学生に就職有利の幻想を与えないかと心配だ」とする、社会調査の先達の辛口コメントもある。

不協和音をなくして統一するよりも、各分野の交流や衝突によって社会調査全体の質を高めていく契機をさぐることは、社会調査協会のめざす方向でもある。

❖ 雑誌と書物との絶妙なバランス

本誌の「強み」は年2回発行という、雑誌

社会調査協会副理事長 天野 正子

と書物との中間的な形態をとっているところにある。雑誌としては、社会調査に関するアップデートな情報や知識、技術を提供していく軽快な起動力が求められる。書物としては、くりかえされる息の長い主題との取り組みが必要とされる。毎号の「特集」「小特集」には両者の絶妙なバランスがみられる。

「厳しい状況下における社会調査」（創刊号）や「世論調査の現場から」（第3号）は、さしずめ前者に、「社会調査教育のあり方をめぐって」（第4号）や「質的調査研究の“質”を問い直す」（第3号）は後者にあたる。歴史の目盛によって社会調査の動きを刻んでいく一方で、結論を急がず、質の高い社会調査を生むための議論の広場を作っていく。その牽引役としての本誌への期待は大きい。

❖ 読み手と書き手、そして作り手との交流

社会調査がだれのために、どのような方法と姿勢のもとに実施されるのか。それが集約された形で現れるのが、社会調査教育の実践の場としての調査実習である。私の周りには、本誌のなかで「調査実習の事例報告」を必ず読むという読者が多い。とくに社会調査実習の担当者は真っ先に読むという。講義型の授業に比べて格段の授業負担と、実習のもつ教育効果に対するアンビバレンスのなかで、他大学の取り組みからヒントや知恵を得ようとするからだろう。

こうした読者が書き手になり、書き手がやがて『社会と調査』の作り手になる。そうした生きた循環が本誌の誌面をさらに活性化することを期待したい。